愛知教育大学教科教育センター研究報告
第15号，PP. 269～280 (March, 1991)

進路成熟の測定と研究課題

愛知教育大学職業指導教室　坂　柳　恒　夫

Measurement and research strategy in the study of career maturity

Tsuneo SAKAYANAGI

Department of Career Guidance

I．序　言

職業指導運動が開始した1900年代の初期から，1950年頃までの進路指導（職業指導）では，主として，個人の進路（職業）選択の行為と選択そのものが強調されていた。すなわち，個人の能力・適性や興味などの特性と，個人が選択した職業に必要な諸要件との適合性が追及された。いわゆる，Parsons(1909)によって提唱された，人間と職業を結合(Matching)させる指導方法に端を発した，特性―因子理論(Trait-Factor Theory)が，今世紀前半までの進路指導の実践を支えてきたのである。

今世紀の中頃より，進路指導の理論や研究の焦点が，進路（職業）の選択と適応をめぐる行動の発達的側面に置かれるようになった。すなわち，進路（職業）の選択や適応を短期的・静態的な現象として理解するのではなく，長期的・動態的な過程として理解していく方向に強調点が移行してきた。いわゆる，Super(1953)に代表される職業的発達理論(Vocational Development Theory)が脚光を浴びるようになってきた。そして，現代の進路指導のフレーム・ワークは，職業的発達理論の提唱を契機として，静態的な「職業モデル」から動態的な「キャリア・モデル」に移行したといわれている（Herr & Cramer, 1988）。

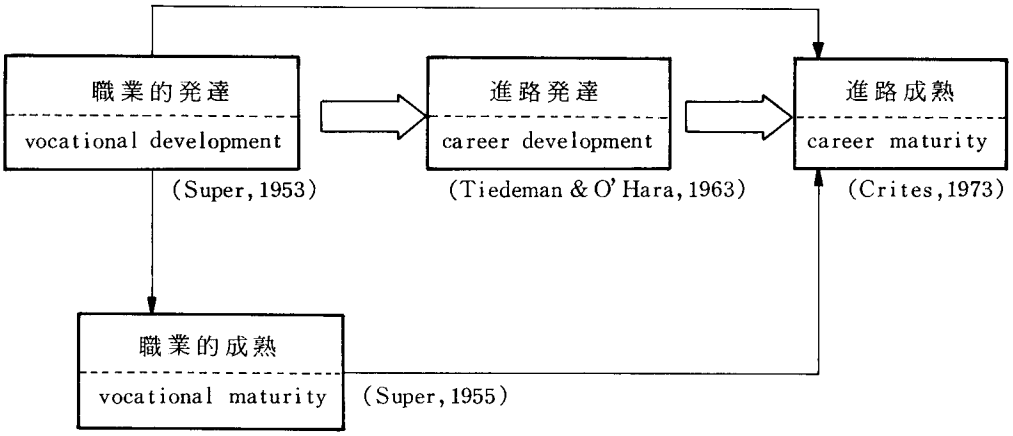
本稿では，発達的なキャリア理論から出現し，発展を遂げてきた進路成熟について，特に，その構成概念と測定法を中心に概観し，そこにみられる特徴や問題点を整理・検討していくことにする。あわせて，今後の青年期における進路成熟の調査研究のためのデザインと課題を提示してみたい。

II．進路成熟の概念とその測定

1．進路成熟の概念

「進路成熟」という用語は，Crites(1973)によって最初に使用された“career maturity”の訳語で，「キャリア成熟」ともいわれる（本稿では以下，混乱を避けるため，特に必要のない限り，原語の“career”に「進路」という語をあてることにする）。

進路成熟という用語のルーツは，Superが最初に概念化した，「職業的発達」や「職業的成熟」に起源をもっている。換言すれば，職業的発達の理論的・実証的研究が進展していくなかで，職業的発達の概念自体にも，進展（変化）がみられるようになってきたことに起因している。そこで，以下，進路成熟概念の系統図（図1）にみられる4つの概念の特徴や違いをみていくことにする。



〈図1〉 進路成熟(career maturity)概念の系統図

(1) 職業的発達

現在の進路指導に多大の影響を及ぼした職業的発達(vocational development)の概念は,Super(1953)によれば,「前後継続して生起する職業行動の根底にあるところの成長・学習のプロセス」を呼称したものであり,従来の職業選択と職業適応という2つの概念を統合化したものとなっている。

また,彼の職業的発達理論の中核にあるのは,自己概念(self-concept)の発達であり,職業的発達の過程を,①自己概念の形成,②自己概念の職業的用語への翻訳,③自己概念の実現,という3つの局面で捉えている。

(2) 職業的成熟

Super(1955)は,職業的発達の程度を把握する目的で,発達心理学の一般原理を適用し,職業的成熟(vocational maturity)の概念を導入した。

職業的成熟とは,職業的発達の連続線上で個人が到達した位置を示すものである。具体的には各年齢段階に期待される職業行動(職業の選択・意思決定と適応)と,個人の職業行動との比較によって測定される。従って,職業的成熟は,職業的発達の程度・水準を示すための従属的な測定概念といえるものであった。しかし,職業的発達理論の中では,職業的成熟は最も実践的な意義をもち,後に大きな発展を遂げた概念となっている(Super, 1974)。

(3) 進路発達(キャリア発達)

この語を最初に使用した,Tiedeman & O'Hara(1963)は,「進路発達(career development)とは,労働で同一性を形成するのに関連した,個人の経験の継続的な不断の流れの諸側面をいう」と定義(概念規定)している。その後,職業的発達にかわって,この用語を使用する研究者が続出するようになり,1970年代以降には,キャリア教育(Career Education)の提唱・普及とも関連して,一般化し,現在に到っている。また,わが国の文部省による進路指導の手引(1984)では,進路発達について,「個々の生徒が人生の諸段階の時間意識,自らのレディネスを自覚し,知識や情報を習得し,問題解決の方法を学び,行動の責任を受容して,当面の進路発達課題に取り組み,その課題を主体的に達成されることによって促進されるものである。」(p.39)としている。

(4) 進路成熟(キャリア成熟)

Crites(1973)は,進路発達よりも,さらに積極的な用語として,進路成熟の概念を使用している。その理由を要約すると,次のようになる。

① 進路発達(career development)とパラレルな過程であるキャリア教育が現在強調されている事実を反映させるためである。

② 「キャリア(進路)」という用語は,「職業的」という用語に結びついた特定の意味をもっていない。

③　「成熟」は，出現する進路の認識や探索，意思決定の根底にある進歩的変化（progressive change）を捉え，かつ伝えている。

最近では，Super自身も，進路成熟という用語を使用し，「進路成熟とは，進路発達課題へ取り組もうとする個人の態度的・認知的レディネスである」という定義を行っている（Super, 1984）。また，King(1989)は，「進路成熟とは，知見の広い，年齢にふさわしい進路決定をするための個人のレディネスである」と定義し，それを進路行動（career behavior）の重要な側面であるとしている。

ここで，以上の諸点を踏まえて，進路成熟概念の基本的特徴について整理しておくことにする。それは，おおよそ，次のように要約できる(Crites, 1978；広井・中西，1978；坂柳，1990を参照）。

①　進路成熟と進路発達の両概念は，職業や職業的な連鎖・パターンの枠に制限されない，幅広い内容を含むものである。現状では，進路成熟と進路発達は，相互関連概念として，並列的に使用されることが多い。

②　進路成熟の概念は，進路発達の概念と比べ，人間としての望ましい（よりよい）方向への志向性，あるいは理想の状態（目標）に向かっての進歩的変化，という教育的価値が重視されている。従って，進路成熟には，望ましい（よりよい）進路発達の意味が内包されている。

③　進路成熟は，個人の進路発達の状態（程度・水準）を示すだけでなく，これも含め，さらに成熟していく過程も含む，有用性のある優れた概念である。

④　進路成熟の概念は，「進路選択・意思決定や，その後の適応への個人のレディネス」を測定・評価する目的で使用されることが多い。

⑤　進路成熟の概念は，職業的発達，職業的成熟，進路発達の諸概念を包括している。

2. 進路成熟の指標（基準・構成次元）

現在までに，SuperやCritesらによって，進路成熟の基準や構成要素について，その提案や検討が行われている。

(1)　Superの基準

Superは，彼の職業的発達理論に立脚する実証的研究として，1951年から20年間にわたって「キャリアの類型的研究(Career Pattern Study:CPS)」を展開してきた。そして既述のように，職業的発達の程度を示すために，職業的成熟の概念を導入した。彼は，職業的成熟を「探索から衰退までの職業的発達の連続線上で到達した位置を示すために用いられる概念（Super, 1955, p.153）」であるとし，最初の職業的成熟の指標（基準）とし

〈表1〉　進路成熟の基礎評価（Super, 1983）

Ⅰ．計画性（Planfulness）
　A．自律性（Autonomy）
　B．時間展望（Time Perspective）
　C．自尊（Self-esteem）
Ⅱ．探索性（Exploration）
　A．質問（Querying）
　B．資源の活用（Use of resources）
　C．参加（Participation）
Ⅲ．情報（Information）
　A．仕事の世界（World of work）
　B．選好した職業群（The preferred occupational group）
　C．職業および他の人生進路上の役割（Occupational and other life-career roles）
Ⅳ．意思決定（Decision making）
　A．原理（Principles）
　B．応用（Applications）
　C．スタイル（Style）
Ⅴ．現実志向性（Reality orientation）
　A．自己知識（Self-knowledge）
　B．はけ口に関する現実性（Realism as to outlets）
　C．選好の一貫性（Consistency of preferences）
　D．価値・興味・目的の結晶化（Crystallization of values, interests, and objectives）
　E．勤労体験（Work experience）

て，①職業選択への志向性（Orientation to vocational choice），②選好した職業に関する情報と計画性（Information and planning about prefered occupation），③職業的選好の一貫性（Consistency of vocational preferences），④諸特性の結晶化（Crystallization of traits），⑤職業的選好の賢明さ（Wisdom of vocational preferences），の5つをあげている。

また，Super & Overstreet(1960) は，第9学年男子生徒の職業的成熟に関する因子分析的研究において，発達課題に焦点をおく定義に立脚して，6次元20指標をあげている。さらに，その後の研究の進展によって，Super(1983) は，〈表1〉に示した，進路成熟の基礎的評価（Basic assessment of career maturity）の基準を発表している。

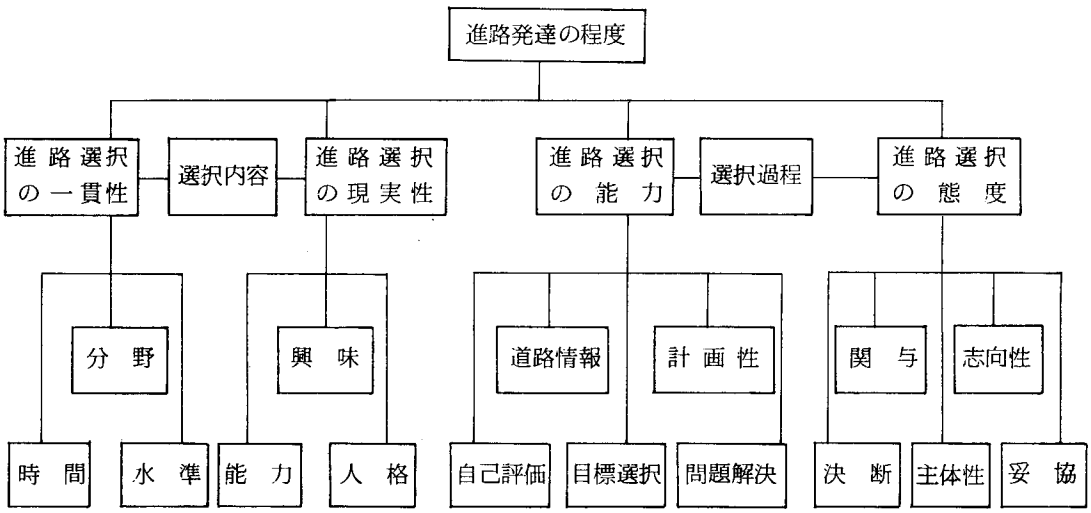
(2) Critesの基準

Superの研究協力者であったCrites(1965) は，従来の職業的成熟の基準を整理して，①選択要因，②独立，③自発性，④手段と目標の認識，⑤時間計画，⑥白昼夢と空想，⑦自己認識，⑧職業知識，⑨自己の適性と職務の要求や資格との関係づけ，の9つの変数をあげている。そして彼は，これらの変数を測定する目的で，職業的発達目録(VDI: Vocational Development Inventory)を開発し，職業的成熟の因子モデル（4次元18変数）を提案した。さらに，1973年には，VDIを進路成熟目録（Career Maturity Inventory: CMI）と改称した。その後の研究の進展によって，Crites(1978) は，〈図2〉に示す進路成熟の階層群因子モデルを提示している。このモデルによって，彼の進路成熟概念の概略を把握することができる。

3. 進路成熟の測定用具

進路成熟の理論やモデルが実践的な意義をもつためには，進路成熟が確実に測定できなければならない。そのために，これまでの進路成熟の諸研究の主要な焦点は，進路成熟の測定法におかれていたといえる。一般に，測定（measurement）とは，規則に従って対象または事象に数字を割り当てることである。すなわち，何らかの物差し（尺度）を使用して，対象に数を与えることである。従って，測定にあたっては，その尺度の信頼性や妥当性，さらに実用性などが問題になってくる。

これまでに，青少年から成人までの進路成熟を評価する目的で設計された多くの測定用具（調査・検査類）が開発されている。ここでは，青少年を対象とした代表的な測定用具について，簡単にみていくことによる（Herr & Cramer, 1988；Betz,



〈図2〉 青年期の進路成熟モデル（Crites, 1978）

1988を参照)。

(1) 進路成熟目録(Career Maturity Inventory: 略称CMI, Crites, 1978)

CMIは,50の態度項目と100の能力項目によって,構成されている。第6学年から13学年までの基準データがある。

態度尺度(Attitude Scale)は,真偽方式によって,次の5領域(各10項目)を総合点で測定する。

① 意思決定における決断(Decisiveness)
② 意思決定における関与(Involvement)
③ 意思決定における主体性(Independence)
④ 意思決定に対する志向性(Orientation)
⑤ 意思決定における妥協(Compromise)

また,能力検査(Competence Test)は,次の5領域(各20項目)を,多肢選択法によって,領域得点と総合得点で測定する。

① 自己評価(Self-Appraisal)
② 職業情報(Occupational Information)
③ 目標選択(Goal Selection)
④ 計画性(Planning)
⑤ 問題解決(Problem Solving)

(2) 進路発達目録(Career Development Inventory: 略称CDI, Super et al.,1981)

CDI(School Form)は,1972年のForm Iから逐次改善され,発展してきたものである。CDIは,進路選択に関する知識と態度を測定評価する目的で,次のような8つの尺度から構成されている。

① 進路計画(Career Planning: CP)
② 進路探索(Career Exploration: CE)
③ 意思決定(Decision-Making: DM)
④ 仕事の世界についての情報(World-of-Work Information: WW)
⑤ 選好した職業群の知識(Knowledge of Preferred Occupational Group: PO)
⑥ 進路発達の態度領域(Career Development Attitude: CDA)—(CPとCEの合計得点)
⑦ 進路発達の知識・技能領域(Career Development, Knowledge and Skills: CDK)—(DMとWWの合計得点)
⑧ 総合的進路志向性(Career Orientation Total: COT)—(CP, CE, DM,WWの合計得点)

(3) 認知的職業成熟検査(Cognitive Vocational Maturity Test: 略称CVMT, Westbrook & Parry-Hill, 1973)

CVMTは,職業に関する知識(120項目)を,多肢選択法によって測定する。第6学年から9学年までの基準データがある。

CVMTは,職業知識の成熟度を,次の6領域の下位尺度により,領域得点と総合得点で測定する。

① 仕事の分野(Fields of Work)
② 職務選択(Job Selection)
③ 労働条件(Work Conditions)
④ 必要とされる教育(Education Required)
⑤ 必要とされる属性(Attributes Required)
⑥ 職責(Duties)

(4) 進路計画のためのレディネス(Readiness for Career Planning: 略称RCP, Gribbons & Lohnes, 1975)

RCPは,Readiness for Vocational Planningの改訂版で,第8学年から10学年を対象に,半構造化された面接法によって,測定評価される(原版は45項目,改訂版は22項目)。

レディネスの指標として,次のような8因子をあげている。

① カリキュラム選択の要因(Factors in Curriculum Choice)
② 職業選択の要因(Factors in Occupational Choice)
③ 言語化された長所と短所(Verbalized Strengths and Weakness)
④ 自己評価の正確さ(Accuracy in Self-Appraisal)
⑤ 自己評定における証拠(Evidence in Self-Rating)
⑥ 興味(Interests)
⑦ 価値(Values)
⑧ 選択の主体性(Independence of Choice)

(5) 進路発達検査(Career Development Test: 略称CDT, 中西・竹内・那須, 1982)

この調査は,1966年に発表された進路発達検査(CDT-1)を発展させたものであり,次のような4つの部分より構成されている。

① 進路希望プロフィールと職業選択理由

② 進路（職業）知識尺度
③ 進路成熟尺度 ―(a)自発性，(b)独立性，(c)計画性，の3つの態度特性を測定する。
④ 職業統覚テスト

また，CDTの進路知識尺度（20項目）と進路成熟尺度（30項目）の両尺度は，中学1年生から高校3年生までについて，3年段階で標準化されている。

Ⅲ 進路成熟の測定をめぐる問題

従来の進路成熟の測定に関する研究は，主として青年期を対象にして，進路の選択・意思決定に到るまでの過程において，個人（生徒）がどの程度の準備性(readiness）を習得しているのかを解明しようとしている。すなわち，これまでの進路成熟研究の焦点は，進路の選択・意思決定に必要な諸要件を，各個人がどの程度獲得しているかを測定することにあったといえる。そして，進路成熟とは，簡潔にいえば，「進路の選択・意思決定や，その後の適応への個人のレディネスないし取組み姿勢」を意味するものであると考えられる。

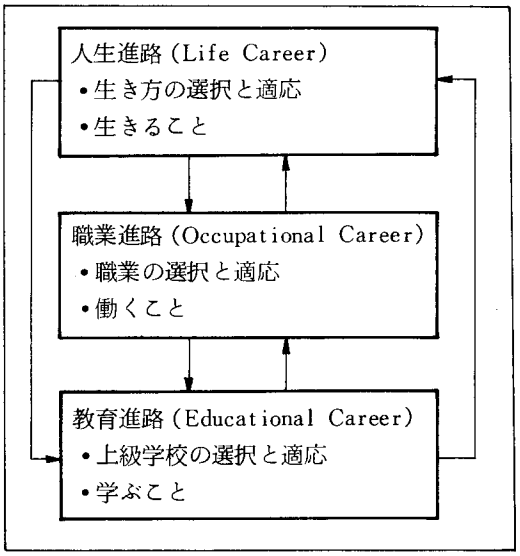
ここでは，進路成熟を測定するための前提条件となる構成概念を中心にして，①進路の視野範囲，②レディネスの構成要素，③成熟のプロセス，の3つの視点から検討していくことにする。

1. 進路の視野範囲

進路成熟における「進路（キャリア）」の意味内容をどのように理解（規定）するかということは，基本的かつ重要な問題である。なぜなら，進路の意味内容（概念）の理解の仕方によって，進路成熟の測定そのものの展開が大きく影響されてくるからである。既存の進路成熟の測定用具の大部分はグローバルな単一の進路（キャリア）概念によって，進路成熟の程度を測定しようと企画されていると指摘できる。ただし厳密に言えば，既述したように進路成熟の概念そのもののルーツが職業的発達理論にあることから，進路成熟のラベルを付けながら実質的には職業的進路成熟の測定に焦点を置いているケースが多いといえる。

最近の進化した進路（キャリア）概念では，個人の時間的な経過（動態的プロセス）の強調だけでなく，視野範囲（内容）においても，「職業（職業的キャリア）」から「人生・生涯（個性的な生き方）」という視点にまで拡大され，より包括的になってきている（Gysbers, 1975 ; Super, 1980, 1986 ; Herr & Cramer, 1988)。また，最近のわが国の進路指導においても，「人生設計」・「生き方」の指導・援助といったことが重視され，強調されている。従って，こうした動向に呼応した，進路成熟の構成概念とその測定法が要請されてこよう。

わが国の中学校・高等学校の進路指導の現状や生徒の実態などを考慮すると，グローバルな単一の進路概念の場合には，その効用と同時に，意味内容が多義的であり，曖昧であるといった問題点がみられる（坂柳，1980)。青少年，特に中学生や高校生を対象とした場合には，〈図3〉に示したように，主要な進路内容として，「人生進路」，「職業進路」，「教育進路」，の3つの進路系列を考えることができる（坂柳，1988, 1990)。一方，成人期においては，「人生進路」，「職業進路」のほかに，「余暇進路」，「家庭進路」といった非職業的側面も考慮する必要があろう。



〈図3〉 進路の内容と相互連関（坂柳，1988を一部修正）

〈表2〉 進路成熟（進路の選択と意思決定のためのレディネス）の測定・評価の基準

進路の系列 成熟目標・内容領域		人生進路（LC） Life Career	職業進路（OC） Occupational Career	教育進路（EC） Educational Career
成熟目標 （指導目標）		①将来の人生設計や望ましい生き方の形成・確立と人生目標の明確化 ②人生をよりよく生きる意欲と責任の自覚 ③人生進路観の形成	①職業的進路展望の形成・確立と職業希望の明確化 ②充実した職業生活への意欲と責任の自覚 ③職業観・勤労観の形成	①教育的進路展望の形成・確立と進学希望の明確化 ②充実した学校生活への意欲と責任の自覚 ③生涯学習観の形成
C 関心性 Career Concern	志向性 Orientation	•人生設計や生き方への志向性（関心性） •生きることへの志向性（関心性）	•職業の世界や職業選択への志向性（関心性） •働くことへの志向性（関心性）	•上級学校や教育選択への志向性（関心性） •学ぶことへの志向性（関心性）
	探索性 Exploration	•人生設計や生き方に関する情報探索 •生きることの意義への探索性	•職業の世界や職業選択に関する情報探索 •働くことの意義への探索性	•上級学校や志望校選択に関する情報探索 •学ぶことの意義への探索性
	一体化 Commitment	•人生進路と自己との一体化 •生きることと自己との関係づけ	•職業進路と自己との一体化 •働くことと自己との関係づけ	•教育進路と自己との一体化 •学ぶことと自己との関係づけ
A 自律性 Career Autonomy	主体性 Independence	•人生設計や生き方の選択における主体性 •生きることへの主体性（自主性）	•職業設計や職業選択における主体性 •働くことにおける主体性（自主性）	•教育設計や志望校選択における主体性 •学ぶことにおける主体性（自主性）
	責任性 Responsibility	•人生設計や生き方における責任の自覚 •生きることにおける責任の自覚	•職業設計や職業選択における責任の自覚 •働くことにおける責任の自覚	•教育設計や志望校選択における責任の自覚 •学ぶことにおける責任の自覚
	向上意欲 Ambition	•生きがいのある人生を創造する意欲と向上性 •生きることへの意欲と向上性（覇気）	•充実した職業生活への意欲と向上性 •働くことへの意欲と向上性（覇気）	•充実した学校生活への意欲と向上性 •学ぶことへの意欲と向上性（覇気）
P 計画性 Career Planning	見通し Vision	•人生進路へのビジョン（長期的展望） •人生の生き方についての見通し	•職業進路へのビジョン（長期的展望） •職業の選択とその後の見通し	•教育進路へのビジョン（長期的展望） •進学先選択とその後の見通し
	目標設定 Goal Setting	•人生進路の目標設定と達成計画 •生きる目標と希望の明確化	•職業進路の目標設定と達成計画 •働く目的と職業希望の明確化	•教育進路の目標設定と達成計画 •学ぶ目的と進学希望の明確化
	現実性 Reality	•人生設計や生き方の現実吟味 •人生の目標と希望の現実吟味	•職業設計や職業選択の現実吟味 •働く目的と職業希望の現実吟味	•教育設計や志望校選択の現実吟味 •学ぶ目的と進学希望の現実吟味

2. レディネスの構成要素

進路成熟とは，進路の選択・意思決定やその後の適応への「レディネス（準備性）」であるとするならば，そのレディネスの指標や構成要素を明確にしておくことが必要である。既に概観したように，進路成熟の構成概念やパラメータ，その測定尺度の内容については各々の研究者によって特色や違いがみられ，進路成熟の測定領域についてのコンセンサスは今なお十分とはいえない状況にある。

これまでの先行研究や，最近のわが国の中学生・高校生の進路意識の実態（坂柳，1988），さらに指導（成熟）目標などを総合して考えると，レディネスの内容としては，少なくとも次のような3つの構成要素が不可欠であると考えられる（坂柳・竹内，1986）。

(1) 関心性（Concern: C）

自己の進路に対して，積極的な関心をもっているか。

(2) 自律性（Autonomy: A）

進路への取り組み姿勢が，主体的であるか。

(3) 計画性（Planning: P）

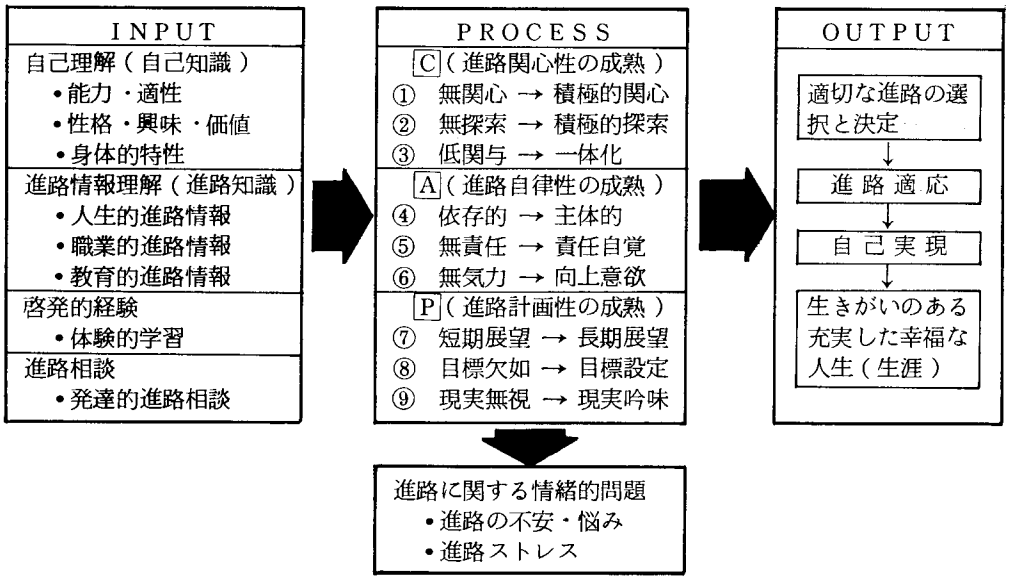
将来展望をもち，自己の進路に対して，計画的であるか。

〈表2〉は，3系列の進路ごとに，成熟（指導）目標と進路選択・意思決定のためのレディネスを測定・評価する基準を示したものである。そして，「関心性(C)」，「自律性(A)」，「計画性(P)」を構成している下位指標（各3側面）について，その概略を提示した。

3. 成熟のプロセス

既述のように，進路成熟は，個人（生徒）の進路発達の状態（程度・水準）を示すだけでなく，成熟していくプロセスも含まれている。従って，進路成熟とは，具体的に，進路のどのような側面が，どのようになっていくことであるのかを明確にしておくことが必要である。

〈図4〉は，進路成熟のプロセスを，インプット・アウトプットのシステムとして示したものである。図からも明らかなように，インプット要因には，進路指導の6つの活動領域のうち，4つの領域があげられている。自己および進路に関する知識（理解）は，広義には，進路成熟の内容（構成要素）として考えられるが，このモデルでは進路成熟過程へ投入される刺激要因として位置づけられている。重要なことは，単に，自己や進路に関する知識を集積していくことではなく，獲得し



〈図4〉 進路成熟のインプット・アウトプット

た知識を，どのように生かそうとしているかである。また，この図には，進路成熟過程を通して発生する，進路への不安や悩み・葛藤，それに伴う進路ストレスなど，「進路に関する情緒的問題」も提起されている。清水(1983)が指摘しているように，進路成熟の次元と，進路の情緒的次元との関係を検討していくことも重要な問題となる。

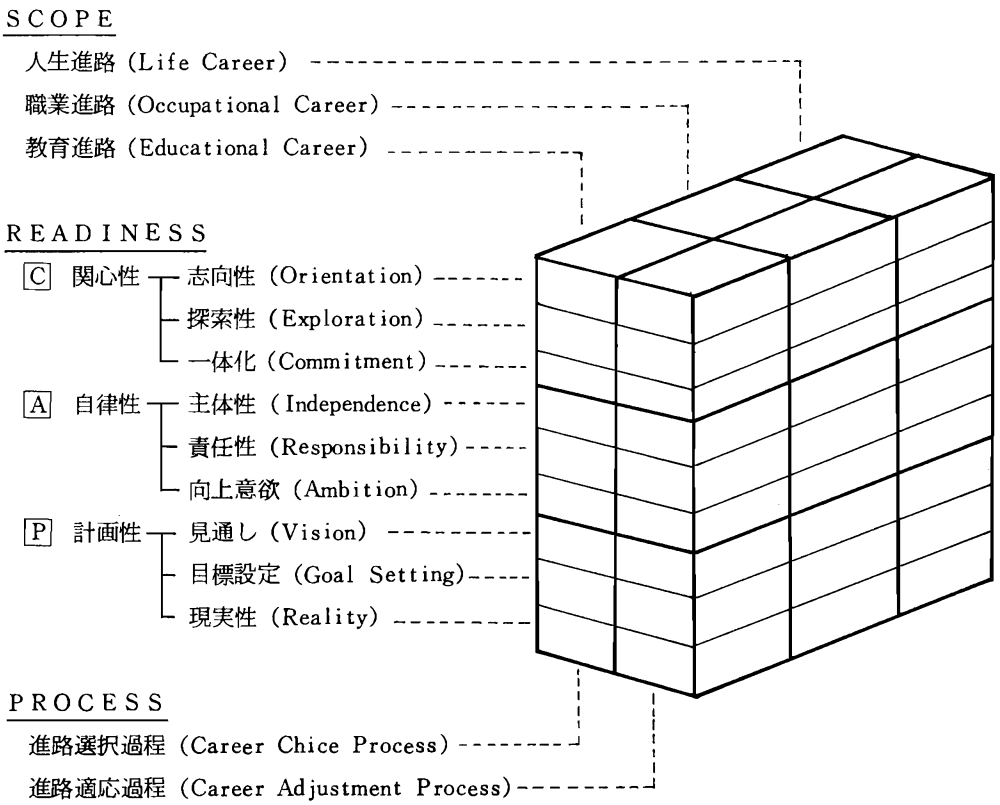
以上，進路成熟の測定をめぐる問題について，3つの視点から整理・検討を行った。これまでの検討結果を踏まえながら引き出される，進路成熟の立体構造モデルを，〈図5〉に示すことにする。

Ⅳ．進路成熟の研究デザインと今後の課題

提案したモデルに基づく進路成熟の今後の研究方向は，便宜的には，進路成熟自体の内部システムに関する研究と，進路成熟の規定要因の解明に焦点をあてた外部システムに関する研究，の2つに大別できよう。以下，簡単に，今後の調査研究における課題について述べることにする。

1．進路成熟の内部システムに関する研究

ここでの基本的問題は，人生的側面に関する進



〈図5〉 青年期における進路成熟の立体構造モデル

路成熟(LCM：Life Career Maturity)，職業的側面に関する進路成熟(OCM:Occupational Career Maturity)，教育的側面に関する進路成熟(ECM：Educational Career Maturity)，の3つの進路成熟の相互関連やバランス構造などを明らかにすることである。具体的には，次のような2つの進路成熟構造の分析が必要となろう。

(1) 進路成熟内構造の分析

まず，LCM, OCM,ECM,の各進路成熟における構成要素（レディネスの指標）について，その要素間の関連性などを詳細に検討していくことが必要である。

また，「関心性（C: Concern)」→「自律性(A：Autonomy)」→「計画性（P：Planning)」，の各進路成熟内部の階層性や順次性に関する検討もされなければならない。

(2) 進路成熟間構造の分析

3系列の進路成熟（LCM，OCM，ECM）の相互関係を明らかにしていくことが必要である。また，3系列の進路成熟を相互に相対比較することによって，進路成熟間の遅滞状態（lag state)を分析することができる。例えば，教育的進路成熟の状態（ECMの水準）と比べ，職業や人生の側面に関する進路成熟の状態（LCM，OCMの水準）が著しく遅れている，などの遅滞の問題を提起できる。

2. 進路成熟の外部システムに関する研究

進路成熟の外部システムに関する研究は，主として，個人の進路成熟（LCM,OCM,ECM）に及ぼす諸要因の解明に焦点をおいている。従って，この段階での研究を進めていくための前提としては，進路成熟の測度が確定され，進路成熟の概念システムがある程度明確化されている必要がある。

また，この外部システムに関する研究の重要な目的は，具体的に，どのような教育的働きかけをすれば，個人の進路成熟（LCM,OCM,ECM）を刺激し，その促進を図ることができるのかを解明することにある。すなわち，個人の進路成熟への促進要因，抑制要因を的確に把握することにより，進路指導における介入方策（intervention strategy)の手がかりを得ることである。

個人の進路成熟への規定要因は，Super（1984, 1986）が指摘しているように，大別して，①個人の内的な要因（個人的変数）と，②個人を取り巻く外的な要因（状況的変数）とに分類できる。

(1) 個人的変数と進路成熟との関係

進路成熟（LCM,OCM,ECM）と個々の個人的変数との相関関係を明らかにしていくことを，主要な目的としている。

個人的変数としては，①自己概念および関連する心理的変数，②能力・適性・学業成績，③性格・興味・価値観，④個人的属性（性別・年齢），などがあげられる。そして，個々の個人的変数，例えば，自己概念についても，いわゆるグローバルな一般的自己概念だけでなく，性役割自己概念などのような個別領域的な自己概念との関連について，また，進路不決断（career indecision）や進路ストレスなどとの関連についても詳細に検討していく必要がある（清水・坂柳，1988）。

(2) 状況（環境）的変数

個人の進路成熟は，個人のパーソナリティその他の内的な要因によって影響されるだけでなく，個人を取り巻く周囲の社会的状況（環境）によっても，また，その時代の社会・経済的・文化的状況によっても影響されていると考えられる。従って，まず，このような数多くの外的事象に対して，その範囲をどこまでにするのかといった問題がでてくる。

しかし，一般的に重要と考えられる状況（環境）的変数としては，①家庭環境，②学校・学級環境，③居住地域環境，④マスコミ，などをあげることができよう。また，個々の環境変数（例えば，家庭環境）についても，どのような側面が影響しているのかといった，緻密な分析が必要になってくる。

(3) 進路成熟への相対的規定力の分析

個人（生徒）の進路成熟過程は，現実的には，個人的変数と状況的変数が複雑に絡み合い影響していると予想される（O'Neil et al., 1980）。そのため，進路成熟と個々の要因との関係を検討するだけでなく，複数の要因を同時に取り上げて，その影響力を総合的かつ相対的に検討していくような，進路成熟への相対的規定力の分析が要請される。具体的には，進路成熟（LCM, OCM, ECM）

を目的（基準）変数にして，複数の影響要因を説明変数にした，規定要因の多次元的な分析が必要となろう（竹内・坂柳，1984：坂柳・竹内，1984）。また，King(1989)は，進路成熟に及ぼす背景的変数（親の社会経済的地位，子供の年齢），家族的変数（親のアスピレーション，家族の凝集性，文化的参加），パーソナリティ変数（Locus of Control），の6変数の機能について，男女別にパス解析を行っているが，このような進路成熟に関する因果モデル（causal model）に基づく分析も，今後の課題となろう。

進路成熟の外部システムに関する研究では，時間的文脈の中で，また，個人を取り巻く複雑な状況的文脈の中で，総合的かつ体系的にアプローチしていくことが必要であり，そのためには，縦断的研究法を積極的に導入していくことが望まれる（Vondracek et al., 1986）。

V．まとめ

本稿では，まず，これまでの進路成熟の概念と測定法を中心に概観した。既存の進路成熟の測度の多くは，包括的な単一の進路（キャリア）概念によって，進路成熟の程度・水準を測定することを目的としたものであるといえる。しかも厳密にいえば，進路成熟のラベルを付けながら実質的には，職業的側面の進路成熟の測定に焦点を置いているケースが多くみられ，必ずしも最近の進化した進路（キャリア）の意味内容に十分に対応しているとはいえない状況にある。

近年，わが国の進路指導においても，「人生設計」・「生き方」の指導・援助といったことが重視され，強調されている。こうした背景には，①進路選択における主体性の欠如や責任の希薄化，②人生設計や将来展望の欠落，③職業（勤労）観，職業進路観の未成熟，④進路先における不適応現象の増加など，総じて、青少年の進路未成熟現象がみられることにある。従って，このような動向や実態に即応した，進路成熟の構成概念と測定法が必要であると考えられる。

本稿では，この問題に取り組むための前提条件となる，進路概念の多義性やレディネスの構成要素，成熟のプロセスなどについて検討を試みた。そして，わが国の中学校・高等学校の進路指導の現状や生徒の実態などを考慮して，グローバルな単一の進路概念ではなく，それを人生進路，職業進路，教育進路，の3つの進路系列に整理・分類したうえで，「進路成熟のＣＡＰ（関心ー自律ー計画）・モデル」等の提案を行った。あわせて，「ＣＡＰ・モデル」に基づく進路成熟の調査研究の方向性について，触れてみた。今後は，こうした進路成熟のモデルに基づいた，実証的研究を進めていく必要がある。進路成熟の測度を確定し，進路成熟の様相や程度，また，進路成熟の規定要因を解明していくことは，これからの進路指導の理論と実践にとっても，重要な課題であると考えられる。

（1990年12月25日受理）

引用・参考文献

Betz, N. E. 1988 The assessment of career development and maturity. in Walsh,W.B. & Osipow, S.H.(eds.) *Career decision making*. Hillsdale,N.J.：Erlbaum.

Crites, J.O. 1969 *Vocational Psychology*. McGraw-Hill.

Crites, J.O. 1978 *Theory & Research Hanadbook for the Career Maturity Inventory*. Mcgraw-Hill.

Gysbers, N.C. & Moore, E. J. 1975 Beyond Career Development. *Personel and Guidance J.* 53, 647-652.

Gysbers,N.C.(eds.) 1984 *Designing Careers：Counseling to Enhance Education, Work, and Leisure*. Jossey-Bass.（日本進路指導学会訳　1987　進路設計　日本進路指導協会）

Herr,E.L. & Cramer,S.H. 1988 *Career guidance and counseling through the life span：Systematic approaches*.（3rd ed.）Boston：Scott, Foresman.

広井甫・中西信男　1978 学校進路指導　誠信書房．

King,S. 1989 Sex Differences in a Causal

Model of Career Maturity. *J. of Counseling & Development*, 68, 208-215.
文部省　1984　中学校・高等学校進路指導の手引 ― 啓発的経験編　実務教育出版.
中西信男・竹内登規夫・那須光章　1982　進路発達調査手引　実務教育出版.
O'Neil, J.M. et al. 1980 Factors, Correlates, and Problem Areas Affecting Career Decision Making of a Cross-sectional Sample of Students. *J. of Counseling Psychology*, Vol. 27, No. 6, 571-580.
坂柳恒夫　1980　進路成熟に関する一考察　進路指導　53(3), 35-39.
坂柳恒夫　1981　進路成熟の測定・評価と活用　中西信男・広井甫（編）　進路指導の心理と技術　福村出版.
坂柳恒夫　1988　揺れ動く進路 ―進路観の発達　教育相談研究, 51, 22-25.
坂柳恒夫　1990　進路指導におけるキャリア発達の理論　愛知教育大学研究報告第39輯, 141-155.
坂柳恒夫・竹内登規夫　1984　中学生の進路社会化に関する研究(II) ― 職業的進路態度の影響要因を中心にして　愛知教育大学教科教育センター研究報告第8輯, 111-121.
坂柳恒夫・竹内登規夫　1985　進路成熟態度尺度（CMAS－3）の作成と項目分析　愛知教育大学研究報告第34輯, 213-230.
坂柳恒夫・竹内登規夫　1986　進路成熟態度尺度（CMAS－4）の信頼性および妥当性の検討　愛知教育大学研究報告第35輯, 169-182.
清水和秋　1983　職業的意思決定と不決断　関西大学社会学部紀要第14巻第2号, 203-222.
清水和秋・坂柳恒夫　1988　進路不決断と進路成熟 ― 父親, 母親, 友人, 教師の影響に関する高校生の横断的な研究　進路指導研究, 9, 28-36.
Super, D.E. 1955 The dimensions and measurement of vocational maturity. *Teachers College Record*, 57, 151-163.
Super, D.E. 1957 *The Psychology of Careers*. Harper & Row.（日本職業指導学会訳　1960　職業生活の心理学　誠信書房）.
Super, D.E.(ed.) 1974 *Measuring vocational maturity for counseling and evaluation*. National Vocational Guidance Association.
Super, D.E. 1980 A life-span, life-space, approach to career development. *J. of Vocational Behavior*, 13, 182-198.
Super, D.E. 1983 Assessment in career guidance: Toward truly developmental counseling. *Personnel & Guidance J.*, May, 555-562.
Super, D.E. 1984 Career & life development. in Brown, D. & Brooks, L.(eds.) *Career Choice & Development*. Jossey-Bass.
Super, D.E. 1986 Life-career roles: self-realization in work and leisure. in Hall, D.T.(ed.) Career development in organizations. Jossey-Bass.
竹内登規夫　1987　進路成熟と学業成績・学習態度の関連に関する研究　進路指導研究, 8, 26-36.
竹内登規夫・坂柳恒夫　1982　進路成熟態度尺度（CMAS－1）の作成と項目分析　愛知教育大学研究報告第31輯, 193-210.
竹内登規夫・坂柳恒夫　1983　進路成熟態度尺度（CMAS－2）の作成とその分析　愛知教育大学研究報告第32輯, 193-208.
竹内登規夫・坂柳恒夫　1984　中学生の進路社会化に関する研究(I) ―教育的進路態度の影響要因を中心にして　愛知教育大学研究報告第33輯, 179-201.
Tiedeman, D.V. & O'Hara, R.P. 1963 *Career Development; Choice and Adjustment*. College Entrance Examination Board (CEEB).
Vondracek, F.W., Lerner, R.M. & Schulenberg, J.E. 1986 *Career Development: a life-span developmental approach*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.